

会員研究発表・ポスターセッション

演題	災害時の資料レスキューマネジメント構築を目指したシミュレーション(DIG)について		
所属	1.九州保健福祉大学、2.鹿児島大学、3.三重県総合博物館、4.国立歴史民俗博物館	氏名	山内利秋 ¹ ・佐藤宏之 ² ・甲斐由香里 ³ ・天野真志 ⁴ ・丹羽謙治 ²
<p>はじめに</p> <p>各地で毎年のように災害が発生し、博物館や民間所在文化財の被災が後を絶たない。自然災害リスクへの対応は地域防災計画等によって全ての自治体で検討・マニュアル化されているものの、博物館・文化財保護分野では未だ指定文化財への対処に限られていたり、担当職員に限られる事もあってBCPが構築されていない事例も見受けられる。一度大きな災害を経験した自治体であっても、時間が経過して担当者が代わる等によってノウハウが継承されていないケースもある。そうした事から災害に備えた運営計画を継続的に構築・検討していくべき必要性が高い。そこで、災害を想定した資料レスキューに関するシミュレーションを通じて市町村クラスの自治体における防減災マネジメントを構築し、自治体内や関係機関との合意形成を目指していく活動を実施して、その効果について検討している。</p> <p>災害を想定したシミュレーション</p> <p>様々な条件下でも実践的な対応が行えるように想定された愛知県立美術館でのシミュレーションミーティングや神奈川県博物館協会での継続的な防災訓練研修のように、災害時を想定した博物館等のアクションが知られている。こうした活動は『文化財保存活用大綱』が各都道府県で出揃った事によって、さらに広く行われるようになりつつあると考えている。課題として考えるのは市町村クラスの自治体でのマンパワー不足や世代交代も含めた職員の異動等から、広域連携や自治体職員以外の団体との連携まで含めた様々な条件下での対応、特に資料レスキュー活動を持続的に準備・対応出来るかどうかであると考える。</p> <p>そこで、災害を想定したシミュレーション訓練であるDIG(Disaster Imagination Game)を博物館・文化財保護分野に応用し、被災資料レスキューの実施を想定して、タイムライン上で変化していく情報・人員・装備、資料退避施設等の整備、外部団体との連携、安全管理を含めたノウハウ理解を目指したワークショップを実施している。元々はマンパワー不足が想定される資料ネット間での連携を想定した運用訓練として考案したが、準備から実施・評価まで自治体担当者とともに確認していく過程で、当該自治体において必要となる災害時の体制や問題点を関係者が把握・理解・共有しやすい事が確認された。また、当初は被災施設から一時保管場所への移動のシミュレーションのみであったが、現在は被災資料処置のハンドリングを組み合わせた。これまでに宮崎県2・鹿児島県2・愛媛県1の自治体を対象として実施してきた。参加者からは「災害に対する準備の不足」「連携の難しさ」「情報収集手段の難しさ」「様々な立場の協力の重要性」等についての理解が確認され、災害マネジメントにつながる課題がみえてきた。</p> <p>今後の展開</p> <p>『文化財保存活用地域計画』を策定しつつある市町村が多い。この中で災害時に関わるマネジメントの構築は極めて重要な課題である。事前防災はもちろん、実際に発生した場合の対応を理解するためにさらに多くの自治体を対象とした活動展開を検討している。また、現在は歴史資料を対象としているが、自然史資料も含めた多様な対象の取扱いも今後は考えていきたい。</p>			